

実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムに係る実践研究
実施方法等

【類型 I】

1. 実践校について

実践校名	(ふりがな) ながのしりつながのちゅうがっこう 長野市立長野中学校		
	学科名	児童・生徒数	学級数
		210名	6学級

2. 実践研究の対象

- 学年 長野市立長野中学校全校生徒
- 生徒数 1学年…70名, 2学年…70名, 3学年…70名, 計210名
- 学年 1学年…2学級, 2学年…2学級, 3学年…2学級, 計6学級

3. 実践研究の実施経過

※○印…実践公開研究授業

	取組内容
6月	第1回研究推進会議(地域連携の在り方について)(6日) ○第1学年農業体験学習(校外学習・社会/総合)(6日) 第2回研究推進会議(各学年の実践進捗状況の確認・ICT活用について等)(21日) ○第1学年「善光寺ウォークに向けて」(地域調査・社会)(23日)
7月	○第1学年「善光寺ウォーク」(校外学習・社会/英語/総合)(16日) ○第2学年「長野市の魅力を発見・発信」(校外学習・社会/英語/総合)(28日) 第3回研究推進会議(1学期の反省)(29日)
8月	第4回研究推進会議(2学期の教育内容の確認等)(6日) OJT研修…ICT活用について(Teamsの活用法等)(17日)
9月	○第2学年「世界から見た日本のすがた～環境問題～」Teamsの活用(社会) 第5回研究推進会議(各学年の実践進捗状況の確認)(29日) ○第2学年「14歳の問い～体験型キャリア出張講座～」(総合/社会)(29日)
10月	第6回研究推進会議(各学年の実践進捗状況の確認)(11日) ○高校第1学年「豊かな生活の実現(現代の雇用・労働問題)」(社会)(26日)
11月	第7回研究推進会議(各学年の実践進捗状況の確認)(2日) ○第3学年「ジェンダーフリー(不利)ー?」(24日)
12月	第8回研究推進会議(各学年の実践進捗状況の確認)(9日) 第2学年「自然環境をいかした北海道ツアーを企画しよう」(社会)(17日)

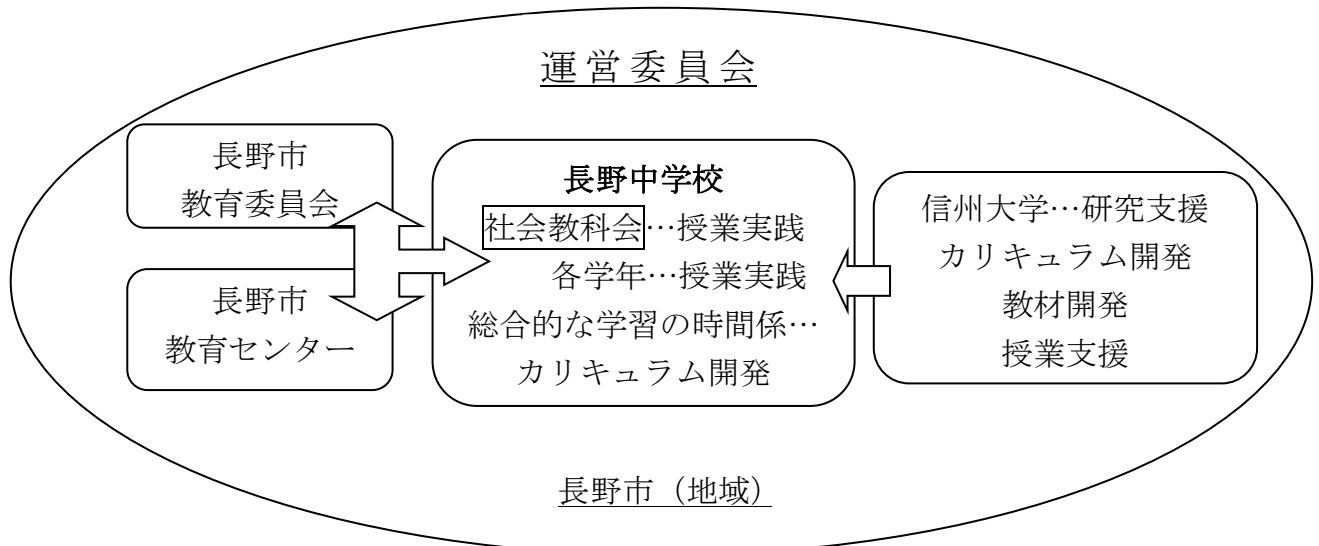
1月	第9回研究推進会議(探究成果のまとめに向けての確認)(28日)
2月	○学習成果発表会(19日) 第10回研究推進会議(学習成果の評価と次年度に向けての改善内容の検討)(19日)
3月	○「地域貢献～災害からの復興～味噌づくり体験」(15日)

4. 実践研究の実施体制

長野市教育委員会，長野市教育センター，長野市立長野中学校で運営委員会を設置し，教育実践に取り組み，教育学的な支援を信州大学の教員が行った。

本事業においては，社会の学習を核に教科横断的なカリキュラム開発を試みていることから，「総合的な学習の時間の時間（翼プロジェクト）」を推進する長野中学校内においては，「総合的学習係」と社会科教員とが共同でカリキュラムの開発を推進することとした。

また，学習実践の展開に当たっては，総合的学習係を中心に学年会で係分担しながら推進し，外部諸機関との連携調整は副校長を中心に各学年の担当職員ともに連絡調整を行った。



運営委員会構成員

No.	氏名	所属・役職等
1	菅沼 尚	長野市立長野中学校長
2	塚田 智紀	長野市立長野中学校副校長
3	丸山 拓磨	長野市立長野中学校教諭
4	山崎 慎也	長野市立長野中学校教諭
5	勝野 学	長野市教育委員会・教育次長
6	齋藤 和久	長野市教育委員会指導主事
7	石塚 弘登	長野市教育センター長
8	阿部 考彰	長野市教育センター指導主事
9	小山 茂喜	信州大学・教授(総合人間科学系)[教育方法学]
10	香山 瑞恵	信州大学・教授(工学系)[教育工学]
11	谷塚 光典	信州大学・准教授(教育学系)[教師教育学]
12	荒井英治郎	信州大学・准教授(総合人間科学系)[教育行政学]

5. 教育委員会等として取り組んだ内容

① カリキュラム開発に際して、カリキュラム・マネジメントに関する研修支援

長野市教育センターと信州大学と連携事業として開発してきたカリキュラム・マネジメント研修教材を活用しながら、教科研究会等で教科横断的なカリキュラム編成に関わる研修の支援を行った。

具体的には、研修教材「カリキュラム・マネジメントハンドブック」を活用して、カリキュラム・マネジメントでは、どういうことをねらっているのかという基本的な内容の確認から、実際の年間学習指導計画の再検討をおこなった。

特に、社会における年間指導計画が教科書の学習内容の配列を踏襲していたことから、生徒が自ら地域の課題を見出し、問いを設定しその解決に向けて学習計画を推進していく単元配列の在り方を検討した。

② 実践授業における授業支援

- ・地理的分野の「地域調査」と総合的な学習並びに英語学習を組み合わせた第2学年の「長野市の魅力を発見・発信」の学習において、校外学習当日指導主事等による学習支援と大学教員による授業評価を行い授業改善に努めた。

- ・公民的分野の単元「男女共同参画社会」の実践授業研究において、指導主事や大学教員が授業設計や授業評価の支援を行った。同時に、長野市教育センターの公開研究授業として長野市内の教員に研修の場を設定した。

- ・地理的分野の単元「日本の諸地域 北海道地方」の実践授業研究において、指導主事や大学教員が授業設計や授業評価の支援を行った。同時に、長野県北方領土問題教育者会議の公開授業として、長野県教育委員会指導主事や長野県国際交流課、長野県内の教員に研修の場を設定した。

③ 運営委員会の開催

長野市立長野中学校の教育実践の充実を図るための運営委員会を定期的で開催し、研究の進捗状況を確認し研究の充実に努めた。

③ 長野市内の教員の研修の場の設定

長野市立長野中学校での実践授業を長野市教育センターの指定研究として、公開研究授業として公開することで、長野市内の教員の研修の場を設定すると共に、研究成果の周知に努めた。

実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラム（概要）

【類型 I】

実践校名：長野市立長野中学校

研究主題

「グローバルな視野を持ちながら、ローカルにたくましく生きる自立した生徒の育成」—地域に根ざし持続可能な社会を目指す「翼プロジェクト」—

主題設定の理由

実践校の生徒はおおむね中高一貫校生として学ぶ意欲が高く、自分の考えをもち進んで他者と関わることができ、学習したことを的確に文章表現できる生徒が多い。

しかし、自分の思いや考えを進んで話すことに抵抗がある生徒も少なからずいることから、教科学習や総合的な学習において、地域社会を学びの場と設定し、自分を取り巻く自然や社会、人とのつながりを見だし、かかわりを深めていく中で、地域社会がかかえる課題を自分の問題としてとらえ、自らの「問い」を設定・追究・提言・行動する学習プログラムを開発し、地域社会と主体的に関わり、社会で生きる意味や目的を自覚できるようになることをめざし、研究テーマを設定した。

なお、開発プログラムは、地域社会の課題発見と課題解決のための手法を、社会の学習を核とした教科等横断的なカリキュラムを編成することで学び、主権者として社会を支えていくために必要とされる公民としての資質・能力を開発することを目的としており、当該学校に限らず他地域での教育実践への参考に大いに役立つものと考えた。

概要

- 地域の特色を探る体験活動を通じて、自ら社会に参画する態度を育む学習プログラムを開発する。

学習プログラムの主な内容

農業体験学習と社会科学習との教科横断的な学習(第1学年)

- ① 課題を設定する（キセキのみそ復活！プロジェクト）【社会科(歴史的分野)・2時間】

「身近な地域の歴史」の学習の課題設定に係わり、総合的な学習(防災教育)と連携し、台風19号の被害について調べることを通して、地域の自然環境や人々の暮らしについて自ら追究する「問い」を設定する。

- ② 課題を追究する（キセキのみそ復活！プロジェクト）【総合的な学習・12時間】
災害からの復興に視点を当て、「キセキのみそ復活！プロジェクト」と称して、地域の伝統産業の復興に向けて体験活動を展開する。(農業体験活動等による社会参画)

③ 自らの「問い」の見返し（キセキのみそ復活！プロジェクト）【総合的な学習・4時間】

地域社会の課題（災害からの復興・伝統文化の継承）に対する体験活動を通して学んだ成果をまとめ、学習発表会（総合的な学習）で情報発信し、他学年の生徒や地域の方々から評価をもらう。

校外学習と社会科学習との教科横断的な学習（第1・2学年）

① 課題を設定する【社会科（地理的分野）・1時間、社会科（歴史的分野）・1時間】

長野市を訪れる海外の方に、長野市の特色を伝えるには、どうすればよいか自ら追究する課題を設定する。

② 課題を追究する【社会科（地理的分野）・3時間、社会科（歴史的分野）・4時間】

長野市の特色について、地理や歴史の視点から追究する。

③ 実践する【総合的な学習・6時間】

校外学習（イングリッシュキャンプ）で観光地に出向き、社会科で調べまとめた内容について、海外からの観光客に伝える体験活動をとおして、長野市民としての帰属意識を醸成するとともに、社会参画の在り方を学ぶ。

社会のつながりを実感するテーマ学習（第3学年）

① 課題を設定する【社会科（公民的分野）・1時間+家庭学習】

女性の仕事と育児の両立について課題意識を持つ。

家庭学習として、生徒の家庭での状況についてインタビューを行う。

② 課題追究【社会科（公民的分野）・2時間+家庭学習】

男女共同参画について、実社会の現状を調べる。

家庭学習として親や祖父母など世代の異なる人たちにインタビューを行う。

③ 調べた内容の検証【社会科（公民的分野）・1時間】

各自の調査結果をもとに、グループごとに課題について議論し今後の自分たちの生き方について考える。

④ まとめ（提案）【社会科（公民的分野）・1時間】

他者の意見や考えを参考に、これからの社会の在り方と自分の行動について考察する。

ICTを活用した他地域との交流学习（第2学年）

① 課題を設定する【社会科（地理的分野）・2時間】

「北海道では、特色ある自然環境の中で、どのように産業を営み、生活を送っているのか」地域の特色を追究するための課題を設定する。

② 課題追究①【社会科（地理的分野）・2時間】

北海道の地域の特色を追究する。

③ 課題追究②【社会科（地理的分野）・2時間】

調べたことをもとに、北方領土など領土問題も含めて北海道を理解してもらうための「北海道ツアー」を企画する課題を設定し、ICTを活用して地元の方々との遠隔授業

で、地元の人々の思いなども企画に反映させる。

④ まとめ【社会科(地理的分野)・1時間】

北海道地方の特色を理解するとともに、改めて領土問題など主権者としての意識を醸成する。

学習プログラムの成果の概要

○ 農業体験学習と社会科学習との教科横断的な学習(第1学年)

「キセキのみそ復活!プロジェクト」では、社会科学習で歴史の身近な地域の歴史について学んだことをもとに、6月から11月まで農業体験を行い、実際に味噌を仕込むまでの活動を展開した。生徒の学習発表会のまとめから、地域の一員として社会にかかわることの大切さと、地域文化を継承していくことの難しさと重要性を学ぶことができたと考えられる。

○ 校外学習と社会科学習との教科横断的な学習(第2学年)

長野市の観光資源を海外の観光客に伝える活動の反省記録等から、地域の特色について、地理的分野の地域調査や歴史的分野の地域の歴史の学習成果を、総合的な学習(イングリッシュキャンプ)の場で活用することができ、自分たちの生活する地域に対する帰属意識の高まりがうかがえるとともに、地域社会の一員として社会にかかわる意識の醸成につながったと考えられる。一方で、説明を受けた方から詳しい説明を求められると、詳細な説明ができなかった場面もあり、地域調査等社会科学習の質の深まりが課題といえる。

○ 社会のつながりを実感できるテーマ学習(第3学年)について

公民的分野の人権等にかかわる内容は、生徒にとっては当たり前だと考えがちであるが、男女共同参画をテーマに改めて同居する家族の実態や世代が異なる親族にインタビューをする活動を通すことで、現代社会が抱える課題に気づいたり、課題の要因を追究したりし、今後の社会の在り方について自分たちがどのようにかかわっていけばよいかなど、意欲的に議論することができた。

○ ICTを活用した他地域との交流学习(第2学年)

北方領土問題など、領土にかかわる問題は生徒にとっては、どこか遠い場所の話という感覚がぬぐい切れないのが実態であるが、日本の諸地域の学習を展開する中で、ICTを活用した遠隔学習を展開したことは、地元の人々の思いに触れる機会となり、感想等から、知識理解の学習から、領土を日本国民として自覚することの大切さを感じた学習へと充実させることができた。

実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラム（内容）

【類型 I】

実践校名：長野市立長野中学校

学習活動① 農業体験学習と社会科学習との教科横断的な学習

- 総合的な学習で「キセキのみそ復活！プロジェクト」と題し、台風 19 号で被害を受けた地域にある小川醸造所のみそを再生させるプロジェクトを展開した。

6 月から 11 月まで大豆栽培に係わる農業体験学習を実施するとともに、社会科の学習として、身近な地域の歴史を調べる学習と連動させることで、地域の産業（農業）や伝統的な食文化（味噌をはじめとする発酵食品）、水害から暮らしを守るための防災等幅広い「問い」の追究を生徒各自が行うようにした。



- 身近な地域の歴史を調べることで、繰り返される地域の水害の歴史と人々の復興の営みに焦点が当たり、防災・減災という観点から地域の一員として自らが自然環境とどのようにかかわっていかなければならないのか、災害復興にどのように取り組んでいかなければならないのかについて考える機会になる。
- 農業体験等校外での体験活動を伴うことから、NPO 等の外部組織の学習支援が必要であるが、社会参画の重要性を認識する学習の深まりをねらうには、何をどこまで外部人材に支援してもらうかの内容を明確にしておかなければならない。
- 社会科の目的（地域調査と課題分析・解決策）を明確にして、総合的な学習を教科学

習の応用の場として位置づけることが学習内容の明確化につながるといえる。

学習活動② 校外学習と社会科学習との教科横断的な学習

- 総合的な学習として展開するイングリッシュキャンプに係わる校外活動の内容に、「長野市の魅力を海外からの観光客に伝える」という目的を設定し、市民として地域社会の活性化に観光資源活用で社会参画体験を実施した。

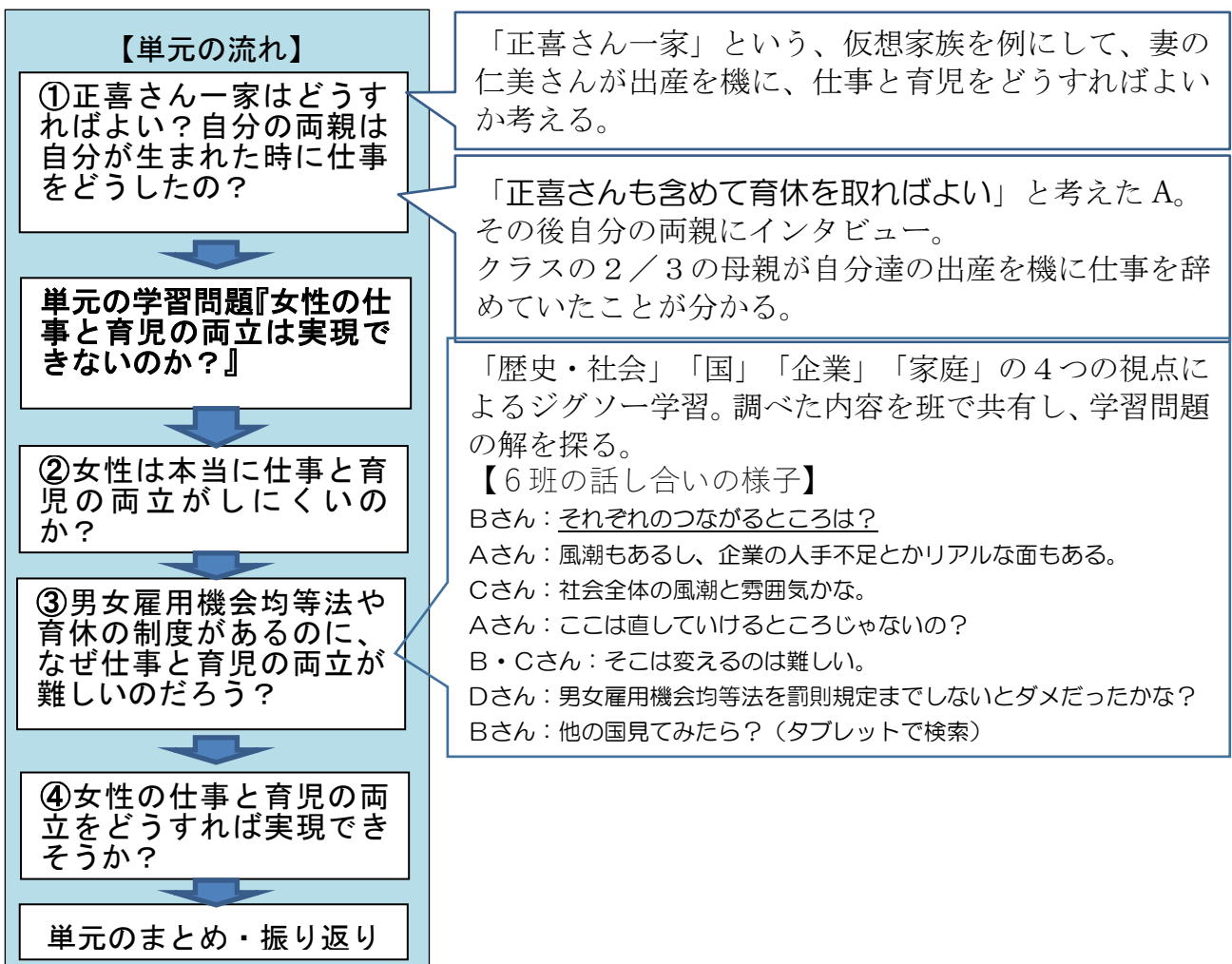


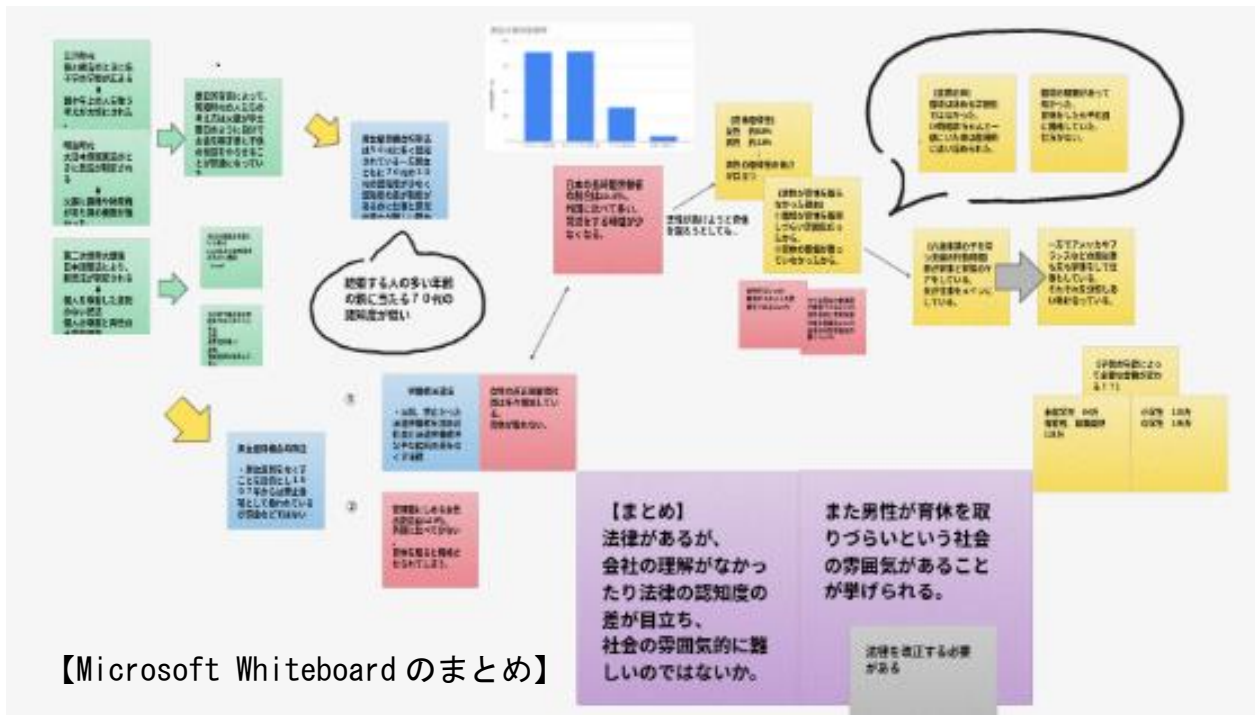
- 校外学習の場を、社会科学習の地理的分野と歴史的分野における地域に係わる学びの成果を発表する場として設定した。
- 社会科における学習内容は、1学年と2学年とに係ることから、学習の目的として課題追究した地域の特色を長野市の魅力として学習の発展として情報発信することであることを意識化させることが重要である。
- 長野市の魅力についての情報発信という視点を明確にし、取り上げる内容についての質の深まりを追究させることが重要で、そのために上級生や大学生などによる発表内容のチェックやアドバイスが重要となる。
- 生徒の反省として「長野市の魅力を知ってもらおうということを目的として活動してきた。調べたり、紹介していくうちに、自分たちの地域の知らない魅力に気づけた。長野市のことを知るいい機会になった。」といった内容があり、市民としての意識化が図られたといえる。しかし、説明に使用したスライドでは、写真を撮影する場所はここが良いとか、秋の紅葉の時期が良いといった表層的な観光情報にとどまっているものもあり、社会科の学習として掘り下げなくてはならない観点については、細部にわたって指導する必要がある。



学習活動③ 社会のつながりを実感できるテーマ学習

- 男女平等に向けての現状や課題について、資料を調べて読み取り、家族や友達と意見交換をすることを通して、男女平等が実現できていない社会の構造に気づき、今後の社会の在り方について、自分の考えを持つことができる授業をねらいとした学習。
- SDGsの「目標5 ジェンダー平等を実現しよう」について、他人ごとではないという実感を持てるよう課題の把握と追究の2つの段階で、インタビュー活動を導入した。
- 主権者としての意識を明確にさせる観点から、家庭科やキャリア教育等で扱われるライフプランニングの発想を示すことが、単なる知識理解にとどまらない学びになると考える。
- 生徒の調べたデータやインタビュー資料について、クラウド上で共有しておくことで、事前にグループ内の他メンバーの情報を知ることができ、授業の中での議論が深まるとともに、まとめが明確になり、学習意欲が高まる。





学習活動④ ICT を活用した他地域との交流学习

- 領土問題については、地理的分野・歴史的分野・公民的分野の3分野で取り扱うこととなっており、地理的な特色を理解した上で、領土問題の歴史的背景や経緯にふれ、公民的分野で領土問題解決の道筋を考える学習により、生徒の領土問題への関心や思考が深まると考え、地理的分野の学習における北海道地方の学習で、北方領土の位置や地形、気候などの自然環境の地域的特色をつかむことで、領土問題を抱える島々に対する興味関心や理解を深めることができ、領土問題に係わる系統的な学びが可能となり、領土問題をきっかけとした主権者意識の醸成が可能になると考えた。
- 地域の観光資源の紹介を総合的な学習で展開していることから、他地域との比較の観点で生徒の学習意識を高めることを目的に、「自然環境」をテーマに北方領土を含む北海道ツアーの企画を学習課題とした。
- 課題解決に向けて生徒たちが収集した内容は2次情報であることから、ICTを活用することで、現地の方から直接アドバイスしてもらったり、より詳しく知りたいことについて質問したりすることを通して、北海道や北方領土の自然環境や観光資源などについての理解を深めることで、地元と他地域との比較による地域の特色をより深く学ぶことができると考えた。
- 北方領土に関する資料等については、独立行政法人北方領土問題対策協会の協力を得た。
- 生徒の感想
 - ・「四島の中で、どの島に行ってみたいか」という質問の答えに「父の出身地である国後島」と



あり，感動と切なさを感じました。とても貴重な学びの機会となりました。

- ・今回は日本側の視点で北方領土を学習したけれど，今度はロシア側の視点で学んでいきたい。
- ・北方領土について，ロシア政府ではなく，ロシア国民はどう思っているのかを知りたい。
- ・もっと北方領土の魅力や歴史について知りたい。

実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラム（成果と課題）

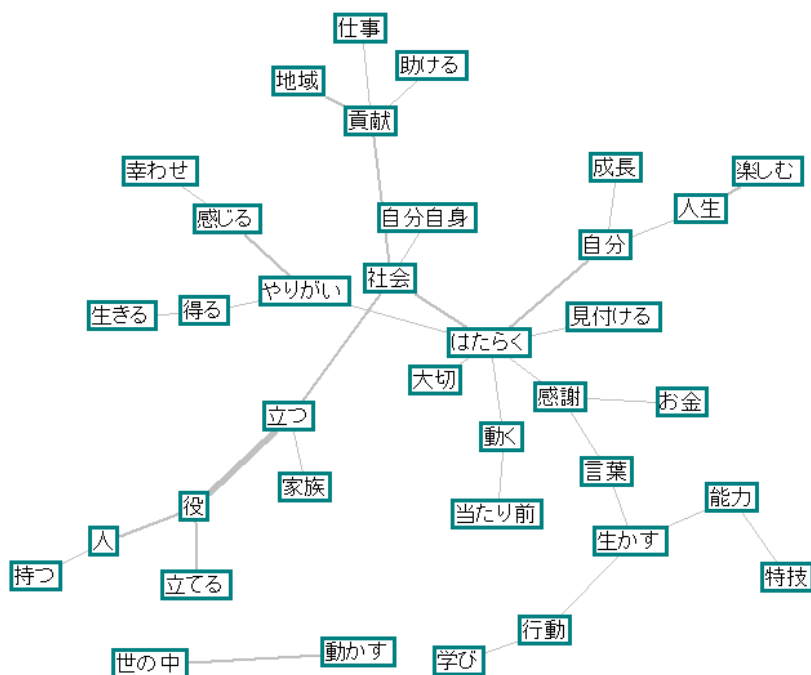
【類型 I】

実践校名：長野市立長野中学校

成 果

（児童生徒の変容等）

- 今年度の学校評価において、社会科の授業の「達成感」として肯定的な回答をした生徒は、1年生 93%，2年生 98%，3年生 86%，学校全体 92%（平成 30 年度 81%）と高い数値を得た。今年度の社会科学習の充実が、生徒の実感となっていると考えられる。
- 同じく今年度の学校評価において、社会科を「好きな教科」として回答した生徒の割合は学校全体で 31%（昨年度 25%，平成 30 年度 16%）と年々高くなっている。
- 2年生では、1年間を通して「働くとはどういうことか」という問いをもって追究した。学習のまとめを見ると、社会へ自分たちから係わることで、社会も自分たちと係わるということを学ぶことができているといえ、3年生での社会科学習での社会参画とは何かを考えるレディネスが形成されたといえる。



（働くとは何かの自分なりの考えのコンセプトマップ-トレンドリサーチ 2015 により作成-）

- 生徒（3年生・学習活動③）の学習を通じたまとめに、「私は最初、制度があるなら男性も育休をとれて平等に暮らしていけると思っていたけど、社会の法が変わっても私達の意識が変わらなければ上手く平等な社会を創るのは難しいのだなと思った。今後こうした男女差別を減らすためにも、国民が『個人の尊重』や『経済活動の自由』等の日本国憲法で定める権利の考えを私達国民がしっかり理解しなければいけないと思う。今はSDGsや情報化によって誰でも自由に情報を手に入れられるし、社会全体で『平等』を目指そうという動きもあるので、私達がそういった情報に関心をもって意識をし、社会で雰囲気をつくっていく必要があると思う。」といった記述が見られた。これから主権者として社会を支えていくために必要な公民としての資質・能力を身に付けていこうとする姿と捉えることができた。

（取組の工夫）

- 本校は、開校（平成29年度）以来、体験や活動を重視した教育活動に取り組んできた。今回の実践研究において、単なる体験や活動でなく、生徒が「台風災害からの地域復興に役立ちたい」「長野市の魅力を発信したい」「誰もがよりよく生きられる社会を作りたい」といった「願い」や「思い」をもつことを大切にしてきた。それにより、実社会における体験や人々の関わりが、生徒にとって実感を伴う学びとなり、学習や活動の目的を明確にし、課題を自分事として捉えることにつながったと考えられる。
- 課題解決型学習として、1年生は復興のシンボルである「みそ」の原料「大豆」の実物を扱ったことが有効であった。大豆の成長は、生徒自身の成長や地域復興の進捗と重なり、大豆やみそについて深く調べたり、みそ玉作りを体験したりする過程と共に、学ぶ意味を考え、学ぶ達成感を体得することにつながった。2年生は、地域の魅力を発信する活動において、校外学習前に、自主的に観光地に出向いたり、積極的に調べ学習に取り組んだりして、実社会にある学びの対象に進んでアプローチし自分のものにしようとする姿につながった。3年生は「男女平等の社会を実現するには」という問いを追究する際に、自分の家庭の子育てについてインタビューを行った。その内容を社会科学習の考えの根拠とし、グループ追究の中で紹介し合うことにより、社会全体の課題を自分事として捉え、課題の解決を自分たち自身から始めようとする意識を生むことになった。
- 2年生の校外学習では、生徒が端末を持ち歩きながら、自分の発表や活動の記録等に利用した。北方領土の学習では、北海道の方々とオンライン会議でつながり、自分たちが考えた北海道ツアーを示したり、現地の方との対話に利用したりした。このように、今回の実践研究における学習指導の工夫として、GIGAスクール構想の推進を位置づけ、積極的に利用することで、学習の幅や可能性が大きく広がることを実感した。

（他地域でも参考となると考えられる点）

- 本校で言えば「東日本台風災害からの地域復興」であるが、全国それぞれの地域で独自の課題があるので、その課題と社会科の学習内容とを関連付けてカリキュラムを編成し学習方法を工夫していくことができる。

- 本校も今年度から本格的に取り組み始めたが、それまでやや漠然とした「体験や経験重視」の教育活動を「防災」「復興」「地域振興」「SDG sの実現」といった角度から教科横断的に見直していく。そして、社会科学習の充実を中心に、総合的な学習の時間や道徳、理科、英語、国語等の学習内容との関連を整理し、より効果的・合理的なカリキュラム編成を行っていく。
- 1人1台端末の利用により、生徒の学習活動の幅が広がる。端末は、より多くの人や遠い人とつながる（つながりやすくなる）ツールとしても積極的に活用することができる。

課題

- 感染症の流行が続く中で、校外学習や外部講師、地域や事業所の方々との交流に制約があり、教育活動が縮小している。ICTの活用などにより工夫して対応できることもあるが、現地に出向き、多くの方とのかかわりの中で課題を解決しようとする学習や活動を進めたい。
- コロナ禍の中、授業等の設計段階において対面での細かな議論を十分に積み重ねることができず、授業後多くの課題に気づかされたことから、2年次のまとめの年となるため、授業公開や校外学習の計画段階で、大学や教育委員会、教育センターの方々との協議や研究を行う場をより多く確保し、より明確な目的やビジョン、教材研究、方法の吟味などを行い、実践研究の充実を図りたい。